

日本語の基本数詞のナナ化とキュー化について：
言語変化資料の整理と考察
(重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007065

日本語の基本数詞のナナ化とキュー化について

—言語変化資料の整理と考察—

城 岡 啓 二

日本語の数詞の体系は、明治期以降¹、大きく変化している。漢数詞（日本語の基本数詞）と和数詞を統一しようという大きな流れは現在まで続いている。個々の数詞の中でも4、7、9はとくに変化が激しい。筆者は、固有名詞中にヨン・ナナ・キューが受け入れられるようになってきた言語変化を調べ、論文（城岡 2009）を書いたことがあるし、ヨン・ナナ・キューへの言語変化を例としてあげ、近過去の日本語に現在とはかなり異なる面があることを公開講座用教材（城岡 2010）にまとめている。その後、基本数詞のシがヨを経由してヨンに変化したり、シがいきなりヨンに変化したりする4の言語変化について発音資料を整理して考察した論文（城岡 2011）を書いた。本稿は、固有名詞ではなく一般語彙について、書き残していた7と9の言語変化、つまり、シチからナナへの言語変化やクヤココノ・ツからキューへの言語変化についてまとめたものである。ヨ化やヨン化の場合と同様に、過去の言語事実を証言する発音資料を基礎資料として用い、ナナ化とキュー化について可能な考察を行ないたい。

1. 発音出版年データの整理方法について

考察の基礎資料になる発音資料の出版年データの整理方法について説明する。本稿で発音出版年データと呼んでいるデータだが、城岡（2011）で用いたものと基本は同じである²。城岡（2011）で附録に付け忘れていた「四本」のヨン化のデータを例に簡単に説明しておこう。まず、発音資料のデータは語形別に整理する。調査資料には、「四本」をシホンとするもの、シホンあるいはヨンホン

¹ 近代化以降と言えるのかもしれないが、筆者は近代化との関わりを論じられるだけの資料を持ち合わせていない。

² 資料名の表記を変えているところが多少あるし、その後の調査を反映させて、資料の増減がある。

とするもの、ヨンホンとだけするものの3種類があった。この3種類の語形の組み合わせ別に資料の出版年を古いものから新しいものへ「アストン 1869、サトウ2 1879、アストン 1888、陸奥 1894、…」のように書き足していく。語形の組み合わせの順番は、最も古い左端の資料の出版年をもとに古い方から並べる。なお、二つの語形を認める文献では、どちらの方がふつうの（よい、正しい）語形であるか示されていることもあるが、区別方法を明記していない文献もあるし、そこまで区別すると、分類が複雑になってしまうので、二つの語形の区別は考慮せず、古いと考えられる語形を先にして、「シホン、ヨンホン」のようにまとめる。資料によっては、ヨンホンがふつうで、シホンと言うこともあるぐらいの場合もあるし、その逆もあるだろう。上に述べた整理方法に従えば、適正な発音資料が十分にあれば、言語変化の順番に①シホン⇒②シホン、ヨンホン⇒③ヨンホンのように並ぶはずであり、「四本」の場合は、実際に、中間にシとヨンのゆれの時期をはさんで、旧語形のシから新語形のヨンへの変化を証言する言語データになっている。

【四本】

- ① シホン（アストン 1869、サトウ2 1879、アストン 1888、陸奥 1894、コバヤシ [1896]－1908、バレー [1899]－1908、赤田／里見 1903、高橋発音 1904、サトウ3 1904、ウエイイツ 1904、鈴木 1906、藤澤 1914、マクガバン 1920、尾本 1936、アベ 1937、ヴァカーリ 1937、松宮 1939、オキノ 1943、長沼 1945b、ヴァカーリ [1939]－1946、NHK辞典 1943、オキノ 1943、サリヴァン 1944、高橋 1945、松宮 1946、イノウエ 1958、ブレイラー 1963）
- ② シホン、ヨンホン（ヤマギワ 1942、三宅読本解説 1943、清岡 1946、長沼 1951、田代 1953、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、オノ 1963、ツアハート [1963]－1976、セワード 1968、イナモト 1972、文化庁 1971、文化庁 1975、マーティン 1975、飯田 2004）
- ③ ヨンホン（マーティン 1954、三省堂アク1 1958、小川／佐藤 1963、基礎 I 分冊 1978、吉川 1989、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば1 1992、谷守 1992、玉村他 1993、谷守 1994、にほんごの会 1995、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012）

本稿では、こういうデータを7と9について集め、言語変化を考察するため

の基礎資料としている。本文中に使わなかった発音出版年データで、ある程度資料数が見つかり、明治期の資料もあったものについては、巻末に参考資料として附録にする。原資料の発音表記はローマ字であったり、カナであったりするが、整理するにあたっては、特殊な仮名遣いや独特の表記は発音表記のためのカタカナ³に整理し直しているので、例をあげると、スイツイ ⇒ シチ、キウ、キュウ ⇒ キュー、ジウ、ジュ ⇒ ジューのように書き換えている。

2. 数詞単独の場合と後続語形（数詞、助数詞）がある場合の7と9

数詞単独の場合から7と9の発音出版年データを見ておこう。

【7】

- ① シチ、ヒチ（クルチウス 1857）
- ② シチ（ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ 1 1876、サトウ 2 1879、佐藤 [1885]－1896、郵松 1886、アストン 1888、西村 [1888]－1898、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、陸奥 1894、黒田 1901、赤田／里見 1903、プラウト 1904、ウェインツ 1904、ラゲ／小野 1905、バレー 1908、ザイデル 1910、マクガバン 1920、ハラダ／クニトモ 1934、ヴァカーリ 1937、マイスナー 1938、オキノ 1943、高橋 1945、松宮 1946、土江 1948、ブレイラー 1963、あたらしい 1973、マクレイン 1981）
- ③ シチ、ナナ（サトウ 3 1904、ローズ＝イニス 1919、グロスマン 1927、常深アク 1932、阿部 1937、ヤマギワ 1942、NHKアク 1943、長沼 1945a、長沼 1945b、ウィミス／アキヤマ 1945、マーティン 1954、井上 1958、小川／佐藤 1963、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、セワード 1968、イモト 1972、カワタ 1977、基礎 I 分冊 1978、田野村 1990、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012）
- ④ ヒチ（プレンティス 1905）
- ⑤ ナナ（尾本 1936、合衆国陸軍省編 1944）
- ⑥ シチ、ナナ、ナン（サリヴァン 1944）

ヒチが①と④に出てきていて、現代なら方言ということになるが、かつては

³ 現代のアクセント辞典で使われているようなカタカナを使い、キュウではなくキューと書く。

ヒチがかなり普及していたことをうかがわせる。ホフマン（1867）も「七」はシチとしながらも江戸ではヒチと記述している。シチとナナについてデータを眺めてみると、ナナがアーネスト・サトウの口語英和辞典の3版のサトウ3（1904）から出てきていて、かなり早い。その一方で、マクレイン（1981）までシチしか認めない発音資料も続いており、ナナを容認しない傾向も20世紀後半まで続いていたことになる。⑤は、かなり早い時期に数詞単独の用法としてナナしか認めない資料があることを示しているが、2点しかなく、孤立している。現代は、シチとナナの両方が認められる時期にはいると言ってよいだろう。

次が数詞単独の「九」の発音出版年データである。

【9】

- ① ク（アストン 1869、サトウ1 1876、サトウ2 1879、佐藤 [1885]–1896、
 郵松 1886、アストン 1888、西村 [1888]–1898、ランゲ 1890、ヴァル
 ター 1891、陸奥 1894、黒田 1901、プラウト 1904、ウエイツ 1904、ラ
 ゲ／小野 1905、プレントイス 1905、ザイデル 1910、マクガバン 1920、
 尾本 1936、マイスナー 1938、オキノ 1943、ウィミス／アキヤマ 1945）
- ② ク、キュー（サトウ3 1904、ローズ＝イニス 1919、グロスマン 1927、ハ
 ラダ／クニトモ 1934、阿部 1937、ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、サ
 リヴァン 1944、長沼 1945b、高橋 1945、土江 1948、マーティン 1954、
 井上 1958、小川／佐藤 1963、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、
 セワード 1968、イナモト 1972、あたらしい 1973、カワタ 1977、基礎 I
 分冊 1978、マクレイン 1981、田野村 1990、新基礎 I 分冊 1990、NHKこ
 とば 1 1992、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、NHKことば
 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012）
- ③ ク、キュ（バレー 1908）
- ④ クー（合衆国陸軍省編 1944）
- ⑤ キュー（ブレイラー 1963）

例外的な記述をしているバレー（1908）や合衆国陸軍省編（1944）やブレイ
 ラー（1963）があるが、大ざっぱに捉えるなら明治期にはクが使われ、その後
 は、現代までキューとクが併用されているということになる。実は、クルチウ
 ス（1857）とホフマン（1867）は数詞の9をキューとする点では調査資料の中
 ではもっとも古い資料だったが、キューの扱いに不審な点があるので、上の発
 音出版年データから除外している。クルチウス（1857）とホフマン（1867）は

前者は1852年来日した出島のオランダ商館長のヤン・ドンケル・クルチウスの原稿にオランダで活躍したドイツ人の日本語学者ヨーハン・ヨーゼフ・ホフマンが手を入れたものであり、後者はホフマン自身の著書である。一の位の9の扱については、クルチウス（1857）のキュー（kioe、「キウ」）はホフマンがクルチウスの原稿のク（koe）を変更したもので、ホフマン自身がそれを認めている。ホフマンは中国語の発音なども併記しているので、どうやら、漢語（中国語由来の日本語）の「九」と数詞の9を完全に同一視しているような気配がある。もともと「九州」や「九尾の狐」など漢語の「九」の読み方にはキューがあったが（経緯については筆者にはよく分からない）、明治期以降は、しばらくは、通常の数詞としてはもっぱらくが使われていたことが他の資料から明らかである。

単独の7と9についてはシチヤクが現在でもまったく消えたわけではないが、それは数詞単独で、後続要素がない場合のことである。7や9のあとに「十」「百」「千」「万」「億」などの数詞が後続する場合⁴や「匹」「本」「枚」「個」などの助数詞が後続する場合は事情がかなり変わってくる。シチヤクの旧語形はかなり消え、ナナやキューの新語形が普及している。後続要素があるときにナナ化やキュー化が進んでいるということは、後続要素の種類との関わりを検討しなければならないだろう。

まず、9に他の数詞が後続して複合語を作る場合は、現代はほぼキュー化を完了している。キュージャー、キューヒャク、キューセン、キューマンである。ここではキュージャーへの変化を示す発音出版年データを示しておこう。

【90】

- ① クジャー（ホフマン 1867、サトウ1 1876、サトウ2 1879、佐藤 [1885] -1896、郵松 1886、西村 [1888] -1898、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、黒田 1901、サトウ3 1904、プラウト 1904、ウェインツ 1904、プレントィス 1905、バレー 1908、ザイデル 1910、マクガバン 1920、常深 1932、阿部 1937、オキノ 1943、合衆国陸軍省編 1944、ウィミス／アキヤマ 1945）
- ② クジャー、キュージャー（ローズ＝イニス 1919、グロスマン 1927、ハラダ／クニトモ 1934、ヴァカーリ 1937、長沼 1945a、長沼 1945b、高橋 1945、GHQ 1946、土江 1948、マーティン 1954、三省堂アク1 1958、ダン／ヤ

⁴ NHKのアクセント辞典の解説では「複合語」と呼ばれ、三省堂のアクセント辞典では「結合数詞」である。

ナダ／エコノ 1958、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、NHKアク新 1998)

- ③ キュージャー (尾本 1936、小川／佐藤 1963、イナモト 1972、あたらしい 1973、カワタ 1977、基礎 I 分冊 1978、マクレイン 1981、田野村 1990、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、ICU 1996、ペリー 2008、みんな 2 2012)

キュージャーが最初に出てくるのは、ローズ=イニス (1919) で、クジャーは次第に廃れていくようだが、NHKアクセント辞典では最新のものまでクジャーを認めている。②の最後尾はNHKアク 1966、NHKアク新 1998となっているが、1966年と1998年のあいだにクジャーを認める他の資料を見付けることができなかつた。一方、キュージャーだけを認める資料は、現在まで途切れずに続いている。二十世紀末までにはキュー化は完了したと見ることができるだろう。なお、クルチウス (1857) では、ホフマンがクルチウスの原稿にあるクジャーを改訂して、キュージャーになっているが、9のところでも述べたように根拠が不明なので、上のデータからは除外した。ホフマン (1867) の方は修正され、Ku-jiyu (クジユ) となっており、上のデータではクジャーとして入れてある。

一方、7の場合は、後続要素の先頭の有声と無声の対立が関係しているようで、語頭が無声子音のヒャクやセンでは、20世紀末にはナナ化が完了しているようであるが、語頭が有声子音のジャーやマンの場合は現在でもシチがそれなりに使えているようである。70と700の発音出版年データを出しておこう。

【70】

- ① シチジャー (ホフマン 1867⁵、サトウ 1 1876、サトウ 2 1879、佐藤 [1885] -1896、郵松 1886、西村 [1888] -1898、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、黒田 1901、赤田／里見 1903、サトウ 3 1904、プラウト 1904、ウエインツ 1904、プレントイス 1905、ザイデル 1910、マクガバン 1920、常深アク 1932、ハラダ／クニトモ 1934、阿部 1937、ダン／カナダ／エコノ 1958、マクレイン 1981)
- ② シチジャー、ナナジャー (ローズ=イニス 1919、グロスマン 1927、ヴァカーリ 1937、長沼 1945a、長沼 1945b、高橋 1945、ウィミス／アキヤマ 1945、松宮 1946、GHQ 1946、土江 1948、マーティン 1954、三省堂

⁵ ホフマン (1867) は「シチジユ」と書いているが、二拍のジユはジャーに対応するものと判断した。

アク 1 1958、小川／佐藤 1963、オノ 1963、NHKアク 1966、イナモト 1972、田野村 1990、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、みんな 2 2012)

- ③ ナナジュー (尾本 1936、合衆国陸軍省編 1944、あたらしい 1973、カワタ 1977、基礎 I 分冊 1978、NHKことば 1 1992、ICU 1996、ペリー 2008)

【700】

- ① シチヒャク (ホフマン 1867、ランゲ 1890、黒田 1901、赤田／里見 1903、ウエイツ 1904、ザイデル 1910、阿部 1937)
- ② シッピャク (ヴァルター 1891)
- ③ シチヒャク、シッチャク、ナナヒャク (グロスマン 1927、高橋 1945)
- ④ シチヒャク、ナナヒャク (ヴァカーリ 1937、長沼 1945b、松宮 1946、GHQ 1946、マーティン 1954、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、文化庁 1971、イナモト 1972、田野村 1990、NHKアク新 1998)
- ⑤ ナナヒャク (オキノ 1943、小川／佐藤 1963、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、ICU 1996、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)

上の発音出版年データのシチジューとシチヒャクであるが、70の②の出版年データは2012年まで続いているが、700の④では、1998年で終わっている。つまり、現在、シチジューが使われることがあっても、シチヒャクはすでにやや廃れているということになる。シチジューやシチマンが現在でも廃れていない理由ははっきりしない。助数詞と7の組み合わせでシチが使われる理由としては、4のシの母音が無声化しないだけでなく、ヨ化したためシとシチの紛らわしさが消え、シチが使われ続けているという理由を次章で検討するが、シチジューやシチマンの場合には、ヨジューやヨマン⁶という語形は調査データにはまったくなかったので、あてはまらない。シチに有声音が続くのでシチのチの母音が無声化しないためという単純な理由かもしれない。

さて、助数詞と組み合わせる数詞の語形は、かなり複雑であるが、この分野の参考文献や資料は外国人向けの日本語教材などを除くと、NHKのアクセント辞典など、現在でも、非常に限られている。現在、数え方に関する本がかなり

⁶ 高橋 (1904) は「十四萬」にジューヨマンの発音を付けているので、ヨマンもある程度は使われただろうが、他の文献にはなく、少なくとも一般化はしなかったものと思われる。

一般読者向けに出版されているが、それらは助数詞について扱ったもので⁷、どういふ場合にどういふ助数詞を使うかということは説明しているが、助数詞と組み合わせる数詞の問題は扱っていない。数詞は基本的に「一」と組み合わせていて、イチと読むかヒトと読むかまでが数詞との関わりで、二以上の数詞との組み合わせは問題にしていふからである。

3. ナナ化しにくいシチと漢語助数詞の種類

明治期以降の言語変化のいふおの到達点として数詞・助数詞の現在の共時的状態を示している最新の資料が『NHKことばのハンドブック第2版』(2005、本文では、これ以降、『NHKことばの〜』と略す)である⁸。数詞・助数詞の組み合わせで現代でもシチが使えるものは多くない。大多数はナナしか使えないし、シチが使える少数のものでもすでにナナを使う方が「放送での基準の発音」といふ判断になっている。たとえば、「七行」は「ナナ(シチ)」のように表記されていて、「(シチ)」は、説明では「場合により()内の発音をしてもよいことを示す」(p.338)とある。「ナナ(シチ)」や「シチ(ナナ)」や「シチ」と表記されている助数詞を取り出すと、合計38語である⁹。

回忌、月(がつ)、行、号、字、時、時間、次元、時限、周年、条、帖、畳、台、題、段(段位)、段(階段など)、度(〜度、角度・緯度・経度・温度などの単位)、度(回数)、度目、人、人前、年、杯、敗、版、(第)〜番、遍、編、ポイント、枚、幕、名、問、夜、里、羽、割(38語)

これらは漢語助数詞と外来語の助数詞であるが、もとは、漢数詞と用い、シチを使うのが普通だったので¹⁰、現在もシチが使えるといふのは、完全にナナ

⁷ 21世紀になってから出版された本で、筆者が気付いたものを古い方から題名だけあげると、「知っているようで知らないものの数え方」「数え方の辞典」「絵でみるモノの数え方辞典」「数え方でみがく日本語」「日本人の数え方がわかる小事典」があった。

⁸ とはいえ、現代の大学生など若者の判断からすると古臭い壮年層以上の日本語の状態ということになるだろう。

⁹ 『NHK日本語発音アクセント辞典新版』(1998)の助数詞の表の方が規模が大きいが、安田(2004: 137-139)によると、合計270語で、シチのみのものが11語、シチがナナに対して優勢なものが7語、ナナが優勢なものが25語とある。

¹⁰ 外来語の場合は発音資料が少ないが、和数詞を使う傾向もなかったわけではない。布村/山崎(1996: 135)では86歳の富山市の老人はひな人形をヒトセット、フタセット、ミセット、ヨセット、ジュセットと数えている。『NHKことばのハンドブック第2版』にも場合により使つてよい発音としてヒトグループやフタグループ、ヒトシーズン、フタシーズンをあげているし、クラ

化せずにシチが残っているということになる。ナナ化をおしとどめた理由として、伝統的な言い方が保持されやすいような分野というものは確かにありそうだ。七段（段位）、七回忌、七位（旧官位）、さらに、今はほとんど使われなくなった単位、七里、七疋などでシチが維持されている。しかし、そのような伝統的な分野の助数詞でなくともシチを維持している助数詞がある。38語の助数詞を観察してまず気付くのは語頭が有声音のものが多くことである。38語中30語（81%）あり、語頭が無声子音のものは8語（22%）しかない。それでは、なぜ語頭が有声音の助数詞でシチが残ったのだろうか。それは、城岡（2011）で詳細を見たように、語頭が有声音の助数詞では、多くの助数詞のシがヨ化したからだと考えられる。ロドリゲス（1608）でもヨ化が認められるので、このヨ化の言語変化は中世には始まり、明治期以降も続いていた。「四男」を例にとると、明治期にはシナンがまだあり、シナンとヨナンの両方を認めるプリンクリー（1897）、ルマレシャル（1904）があり、その後、ヨナンだけを認める発音資料が続いているので、ヨ化への言語変化が明治期以降にも起きていたことになるだろう¹¹。シとシチの区別が紛らわしいことは先行研究でも指摘されていることであるが、シがヨ化してしまえば、ヨとシチなら紛らわしさはなかったと考えられるのである。38語中ヨを取りうる助数詞が20語（字、時、時間、次元、時限、畳、段（段位）、人、人前、年、里、帖、台、段（階段など）、度（回数）、度目、（第）～番、枚、幕、名）あり、54%になる。語頭が有声音の助数詞でもヨ化しなかったものは、シとシチとの間に紛らわしさはあったことになる。しかし、現在ではヨが使われなくとも以前はヨ化していたと考えられる助数詞もある。「四行」の発音資料は少ないが、国語調査委員会編（1916：70）は「十四行」にジューヨギョーを認めているので、「四行」でもヨギョーが使われていた可能性がある。「四問」は、NHKアク（1966）、文化庁（1971）はヨモンも容認している。「四羽」は、ヤマギワ（1942）、長沼（1951）、マーティン（1954）がヨワを認めている。「四割」のヨワリもグロスマン（1927）にある。ということで、4に現在ヨが使える助数詞や以前ヨだった助数詞で、多くシチが残っていることは確実である。

それでは、ヨ化しなかった語頭が有声音の助数詞や語頭が無声子音の助数詞でシチが残っていることがあるが、その理由は何だろう。可能性としては、シとシチの紛らわしさを理由とする解釈と矛盾しない解釈も可能である。早めに

スではヒトクラス、フタクラスの和数詞しか認めていない。

¹¹ 詳しくは、城岡（2011：122）の注の19を参照。

ヨン化した助数詞を想定すれば、ヨン化してしまえば、ヨンとシチなら紛らわしさはなくなると解釈することができる。したがって、語頭が有声音であれ、無声子音であれ、ヨン化が早かったものは、その時点からシチとの紛らわしさは消滅したはずである。ヨン化の遅かった助数

【表1】

	シチの 残存	シチの 最終年	ヨンの 開始年
七杯	○	2012	1937
七冊	×	1990	1937
七本	×	1972	1942
七歳	×	1971	1942
七匹	×	1972	1937
七個	×	1971	1942

詞については、シとシチの紛らわしさがヨン化とナナ化を同時に促したと説明することができる。しかし、これは実証するのが難しいようだ。城岡 (2011) である程度発音資料が見つかるものについて、ヨンの使用を容認する資料の出版年を選択使用開始時期として、シチを容認する発音資料の最終年とならべて表1を作成した¹²。これを見ると、『NHKことばの〜』でシチが残っている「杯」¹³が取り立てて早いわけではない。

もう一つ、順序数をあらわす用法ではシチなど数詞の旧語形が維持されやすいのではないかという可能性を考えてみたい。体系として序数のない日本語では形式的に区別できるわけではないし、現実の使い方はどちらか決めるのが難しい場合もある。現代でもシチしか使われない助数詞やシチが優勢な助数詞は、『NHKことばの〜』の38語のシチが残存する助数詞のうち13語（回忌、時、時間、次元、時限、段（段位）、人、人前、年、夜、里、羽、割）である。この中に順序数を表わす用法しか考えにくい助数詞を探すと、「回忌」「月（がつ）」「時」「次元」「時限」「段（段位）」と6語もある¹⁴。また、使い方によっては多くの助数詞が、「第〜」や「〜め」の形式にすることで順序数の使い方では、その場合にシチが使えるかどうかの傾向が変わるということも考えられる。また、順序数の使い方とそうでない使い方の両方ができる「年」のようなものもある。

¹² ヨンの開始年の発音出版年データは、「四本」は本稿にあるが、残りは城岡 (2011) にある。シチの最終年については、「七冊」のシチサツのデータは①シチサツ（常深 1932、サリヴァン 1944、井上 1958）、②シチサツ、ナナサツ（ヤマギワ 1942、清岡 1946、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、ブレイラー 1963、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、田野村 1990）で、「七個」のシチコのデータは、①シチコ（グロスマン 1927、サリヴァン 1944）、②シチコ、ナナコ（ヤマギワ 1942、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975）である。「七冊」も「七個」も明治期の発音資料がなかったので、附録には掲載していない。

¹³ 静岡大学の学生34人に確認してみたが、「7杯」はナナハイとしか発音しないようである。おそらく、残っているともしもっと上の年齢層だろう。

¹⁴ 安田 (1994: 138) によると、『NHK日本語発音アクセント辞典新版』(1998) にある助数詞では、兄弟や姉妹を順番に区別する「男（なん）」や「女（じょ）」は順序数の使い方であるが、シチしかとらないとされているようである。

「平成7年に引っ越した」なら順序数の使い方の7年だし、「北海道に7年いて、それから静岡に帰ってきた」なら数量単位としての7年の使い方である。静岡大学の学生34人に聞いてみると（2012年調査）、『NHKことばの～』が認めるシチハイ（7杯）の使い方は順序数であってもなくとも認めないようで、全員ナナハイやナナハイメだったが、「7年」の場合は、「北海道に7年いて…」ではシチネンしか使わないひとがおらず、ナナネンしか使わないひとがほとんどだったが（34人中29人）、「平成7年」ではシチネンしか使わないひとが5人で、シチネンとナナネンの両方使うひとも7人あり、シチがかなり容認される傾向が明瞭である。つまり、年号のように順序数の使い方と解釈できるときにシチが認められやすい傾向はあると言えるだろう。過去にもこのような使い分けの傾向があった可能性があり、「七月」がシチガツであり続けるのに「七か月」ではナナが使われるようになり、「七時」ではシチジが今でも普通の言い方でナナジを認めないひとが多いにも関わらず、「七時間」ではナナジカンも使われるようになってきているのは、このような順序数の使い方とシチとナナが関係している可能性がある。

時間関係の助数詞は順序数の使い方とそうでない数量単位の使い方の区別が比較的明確である。『NHKことばの～』の判断に基づいて、それぞれの使い方があれば○、なければ×を付けて、これと数詞シチが残っているかどうかを表にまとめておこう（表2）。最後の「分」や「秒」は例外であるが、他の場合で

【表2】

	発音	順序数	数量単位	シチ/ナナ
年	ネン	○	○	シチ（ナナ）
か年	カネン	×	○	ナナ
月	ガツ	○	×	シチ
か月	カゲツ	×	○	ナナ
時	ジ	○	×	シチ
時間	ジカン	×	○	シチ（ナナ）
分	ブン	○	○	ナナ
秒	ビョー	○	○	ナナ

は、順序数の使い方があれば、七年、七月、七時と、シチが少なくとも容認される。逆に、数量単位の使い方があれば、ナナネン、ナナカネン、ナナカゲツ、ナナジカン、ナナブン、ナナビョーと、

ナナが使えるということになっている。「分」や「秒」に順序数の使い方と数量単位の使い方があるというのは、7時7分7秒というように時刻を表わす使い方が順序数の使い方と解釈できる。『NHKことばの～』に従えば、①はだめで、②が正しいという判断である。

① *シチジシチブンシチビョー

② シチジナナフンナナビョー

同じ「分」や「秒」でも、何かに7分かかったり、7秒かかるときは数量単位の使い方である。「分」や「秒」で順序と単位が区別がなされていないのは、日常使う頻度が高くないからかもしれない。なお、NHKの発音資料では『NHK日本語発音アクセント辞典新版』(1998)もナナフンしか認めていないが、シチフンは発音出版年データでは1998年の資料まで見つかるので、シチが使えなくなったとしてもそれは比較的最近のことで、現在でも容認するひとがそれなりにいるのではないかと思う。シチフンを容認するひとがシチフンを使うのは、順序数の使い方、つまり、時間の言い方と時刻の言い方では、9時7分のように時刻の方かもしれない。「七分」の発音出版年データは以下のようになっていいる。

【七分（時間）】

- ① シチフン（赤田／里見 1903、マクガバン 1920、長沼 1945b）
- ② シチフン、ナナフン（ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、サリヴァン 1944、高橋 1945、長沼 1945a、松宮 1946、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、プレイヤー 1963、文化庁 1971、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、みんな1 1998）
- ③ ナナフン（NHKアク 1966、基礎 I 分冊 1978、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012）

4. 音韻的に目立たないクからキューへの言語変化

クもキューも漢語で、キュー化は基本的に漢数詞内の勢力争いで、1拍で短く、数詞にアクセントが来ないことが多く、母音が無声化してしまうことがあるクから数詞に必ずアクセントを持ち、無声化しない二拍のキューが普及したことを意味している。古くは単独でアクセントを持たなかったクが単独ではアクセントを持つように変化したのが、助数詞との組み合わせではアクセントがないのがふつうで、母音が無声化する可能性があった。第四期、第五期の国語の国定教科書（1933、1941）には牛若丸と弁慶の話があるが、弁慶がこれまでに「九百九十九本」の刀を集めていて、それで千本めだという自慢とも脅しともとれる発言をするのであるが、「九百九十九本」（第四期巻三）に神保（1934：45）

の『小学国語読本朗読法（巻三）』では「クヒャク クジュウ クホン」と読みが付けられている（第五期の教師用書も同じ）。神保は『朗読法』でアクセントや母音の無声化も記述しているが、クにはアクセントがなく、クヒャクもクジューもクホンも平板型アクセントとして記述していて、クヒャクとクホンのクに無声化の印を付けている。母音が無声化しないクジュー以外の9がかなり聞き取りにくかったのではないだろうか。アクセントの下がりめを「ㄱ」で表わすなら、現代では、キュㄱーヒャクキュㄱージューキュㄱーホンになっていて、アクセントの面でも、拍数の面でも、少なくとも9を聞き落とすことがないような言語変化が起きたことになるだろう。

さて、キュー化の言語変化の起こりやすさになんらかの規則性はあったらどうか。母音無声化の条件とのあいだに規則性があるようである。発音出版年データがある程度集まる助数詞で¹⁵、キューを容認する最初の3点の資料の平均出版年を出してみよう。表は出版年でソートしてあるが、キュー化が早いのは無声子音の助数詞で、遅いのが有声音の助数詞であることに例外はない。有声音の助数詞の中では

【表3】

キュー ＋ 助数詞	助数詞の語頭 有聲／無聲	初出 3点平均 出版年
キューフン（分）	無 声	1942
キューソク（足）	無 声	1947
キューサツ（冊）	無 声	1948
キューホン（本）	無 声	1948
キューカイ（階）	無 声	1958
キューハイ（杯）	無 声	1961
キューサイ（歳）	無 声	1965
キュービョー（秒）	有 声	1967
キュード（度）	有 声	1972
キューバン（番）	有 声	1975
キューバイ（倍）	有 声	1983

「9秒」のキュー化が早い。実は、赤田／里見（1903）ではクビョーだが、その後の資料が見つからないので、あるいはもっと古くからキュービョーと言っていたのかもしれない。同一意味分野の「9分」がやはりキュー化が早いので、つられて早くなった可能性があるだろう。なぜなら、「9分9秒」がキューフンクビョーではどうしても言い方の違いを意識してしまうし、同一語形にするという美意識¹⁶が働き続けた可能性があるだろう。もっとも現代でも「9時9分

¹⁵ 見つかった発音資料の数が6点以上あり、なおかつ、クとキューのゆれが複数の資料で確認できる助数詞に限定して、キューを容認する最初の3点について平均出版年を出した。

¹⁶ 数詞の同一語形を繰り返す方を正しく感じる感覚は調査した文献にかなり見られた。たとえば、ミウラ（1965）はキュージュークューかクジュークだとしているし、77の場合も、シチジュースチかナナジューナナである。カワタ（1977）は、一の位の9はクを使うのが基本と考えていて、ジュークだし、ハチジュークであるが、99の場合は、キュージュークではなく、キュージュー

9秒」はクジキューフンキュービョーだからすべてがキューに統一されているわけではないし、美意識を言語変化の理由に想定しなくても、クが一般に廃れてしまえば、クジューキューでもキュージュークでもクジュークでも使いにくく感じられるはずで、語形の不一致を忌避する規則性を想定する必要はないように思われる。

ところで、無声子音で始まる9は早くキュー化したのが、クとキューのゆれもほとんど示さずに一気にキュー化したもののがかなりある。九冊、九艘、九軒、九か月、九個などで、語頭がサ行清音やカ行清音のものに限られているようだ。

クからキューへ変化した助数詞を観察すると、クとキューでゆれていた時期を経ているものが多い。有声音で始まる助数詞がそうであるし、「九台」や「九年」は現在でもゆれている。語頭が無声子音の助数詞の中には発音資料がかなり見ついているのにゆれないで、一気にクからキューに変化したとしか思えない助数詞がある。たとえば、「九艘」がそういう言語変化だった。クソーとキューソーをあげる発音資料がそれなりに見つかったが、両方の語形をあげている資料がなかった。「九足」も同様なので、サ行清音、つまりs音で始まる助数詞である。

【九艘】

- ① クソー (ホフマン 1867、アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、高橋 1945)
- ② キューソー (ヤマギワ 1942、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、セワード 1968、NHKことば1 1992、NHKアク 1966、NHKことば2 2005)

【九足】

- ① クソク (アストン 1869、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、長沼 1945b、高橋 1945、井上 1958)
- ② キューソク (ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、ブレイラー 1963、NHKアク 1966、セワード 1968、文化庁 1971、基礎 I 分冊 1978、NHKことば

キューとしている。外国人研究者の記述でも、ブロック／ジョーデン (1945:160) は、ヨンジューヨンやシジューシのように複合数詞内で4や9を2度使う場合、同一語形が使われるとはっきり述べている。マーティン (1954) も44の発音について、シジューシか、ヨンジューヨンだとしている。外国人研究者の場合は、日本人協力者の美意識に基づいた判断の反映かもしれない。一方、『NHK日本語発音アクセント辞典』(新版、1998) では、1977年の77は「ナナジューナ」または「ナナジューシチ」としているので、同一語形の繰り返しを正しいとは判断していないようである。

1 1992、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

しかし、「艘」と「足」はサ行清音だが、サ行清音なら必ずゆれないわけではなく、「九歳」の場合はクサイとキューサイのゆれが発音資料に記録されている¹⁷。

【九歳】

- ① クサイ (赤田/里見 1903、常深アク 1932)
- ② クサイ、キューサイ (グロスマン 1927、高橋 1945、オノ 1963)
- ③ キューサイ (GHQ 1946、文化庁 1971、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1985、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、NHKことば 1 1992、谷守 1994、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

とはいえ、ハ行であれば、「九杯」「九匹」「九本」と基本的にゆれた時期があるようなので、子音の種類によって言語変化の在り方が影響を受けているように思われる。

【九杯】

- ① クハイ (ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、サトウ 3 1904、ウェインツ 1904、長沼 1945b、井上 1958)
- ② クハイ、キューハイ (グロスマン 1927、ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、三宅 1943、ダン/ヤナダ/エコノ 1958、セワード 1968)
- ③ キューハイ (三省堂アク 1 1958、ジョーデン 1962、ブレイラー 1963、文化庁 1971、基礎 I 分冊 1978、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、谷守 1994、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

【九匹】

- ① クフィキ (クルチウス 1857)

¹⁷ 現代日本語を実験音声学的に調査した吉田 (2002) によると、後続母音が広母音だと母音は無声化しやすいので、クサイのクの母音はクソーやクソクよりも無声化しやすかったはずであるし、実際、常深/神保 (1932) でも無声化するものとして記載されている。にもかかわらず、キュー化が一気に起こらず、クサイが比較的長く維持されたことは何らかの別の理由があるものと思われる。

- ② クヒキ (ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ 2 18f79、アストン 1888、サトウ 3 1904、赤田/里見 1903、ウェインツ 1904、常深 1932、尾本 1936、サリヴァン 1944、長沼 1945b、井上 1958)
- ③ クヒキ、キューヒキ (グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、NHKアク 1943、三宅 1943、松宮 1946、ダン/ヤナダ/エコノ 1958、セワード 1968)
- ④ キューヒキ (小川/佐藤 1963、ブレイラー 1963、NHKアク 1966、文化庁 1971、イナモト 1972、基礎 I 分冊 1978、NHKことば 1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

ホフマン (1867) はクヒキとならんでs-h交替なのかクスキの発音もあげているが、考慮に入れなかった。

【九本】

- ① クホン (ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、サトウ 3 1904、赤田/里見 1903、ウェインツ 1904、常深 1932、尾本 1936、阿部 1937、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、長沼 1945b、井上 1958)
- ② クホン、キューホン (グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、三宅 1943、高橋 1945、松宮 1946、ダン/ヤナダ/エコノ 1958、セワード 1968)
- ③ キューホン (三省堂アク 1 1958、ジョーデン 1962、小川/佐藤 1963、ブレイラー 1963、文化庁 1971、イナモト 1972、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

無声子音に挟まれた母音の無声化については、後続無声子音の種類により母音無声化の容易さに違いがあることを吉田 (2002) が実験音声学的に確認していて、ハ行子音/h/の前では母音は無声化しにくいことなどが明らかになった。後続子音がハ行子音だと、先行子音が/k/音の「気品」「寄付金」「騎兵」、先行子音が/s/音の「私費」「私服」「市販」の母音無声化率は0%から33%に過ぎないが、「菊」「北」「奇数」「岸」「敷く」「舌」の母音の無声化率は100%と著しい違いが出ている¹⁸。もちろん、吉田の研究結果が過去の日本語にもそのままあては

¹⁸ 吉田 (2002) の結果では、前後が摩擦音のsも無声化率が低く、「指数」「刺繍」も22%、17%と母音の無声化率が低い結果になっている。

まるのかどうかは証明しようのないことであるが、キュー化が始まるのはハ行子音で始まる助数詞が必ずしもおこなわれているわけではないが、クハイとキューハイ、クヒキとキューヒキ、クホンとキューホンの間で長くゆれが観察され、クが長く残ったことは上の発音出版年データから明らかである。吉田(2002)の知見に基づいてクが長く残った理由を推論するなら、無声のハ行子音の前では母音はかなり無声化しにくく、クは母音が有聲のまま存在し、無声化したクほど聞き取りにくくなかったためという理由が考えられるだろう。

母音の無声化以外でクからキューへの言語変化に関連している可能性があるのは、シチとナナで問題にした順序数の使い方と数量単位の使い方の区別である。順序数の使い方では、現代でもクジ(九時)であるし、クガツ(九月)である。数量単位になれば、キュージカン(九時間)も容認されるし、キューカゲツ(九か月)と言わなければならない。これについては、前章でシチとナナでやや詳しく考察した内容がそのままあてはまるように思われる。

5. 和・漢二系列の数詞の一本化とナナとキュー

二系列の数詞を統一する観点から考えてみると、明治期からの言語変化で漢数詞に統一されることはほぼ決まっていたと言える。なぜなら、明治期でも11以上では漢数詞を使うしかなかったのだから¹⁹10以下の言い方を漢数詞に変えてしまえば数詞が統一できる状態だったからである。五にイツが使えたとしても十五や五十や五百ではゴだったのだから、統一するならゴで統一するのが順当だということである。実際、現在までそのように言語変化が進んできていて、フタやヒト以外は漢数詞が統一数詞の地位を固めつつある。しかも、ニフクロぐらいならおそらくすでにそれなりに使われていて、フタが廃れ、ニが統一数詞になるのは時間の問題だろうし、イチフクロが普及するのも時間の問題かもしれない。実際、一部の和語の助数詞で現代の大学生はイチを使うようになっているようだ。大学の授業をコマで数えるのは広く行われているらしく、ネット検索では関西の大学生も関東の大学生も使っていて、たとえば、授業の無い時間帯を「空きコマ」と言っている。コマの数え方だが、筆者の回りの静岡大

¹⁹ たとえば、赤田/里見(1903:17)にヒトクミ、フタクミの言い方が出ているが、トクミの次はジューチクミ、ジュニクミである。なお、『NHKことばのハンドブック第2版』(2005:337)では、やや時代錯誤の感がぬぐえないが、今だに明治期の原則で和語の助数詞と和数詞の組み合わせを説明して、個々の場合には「基準となる発音」(ヨン、ナナ、キューを使い、他は漢数詞のこと)に従うものが多いという説明をしている。

学の学生に確認しても、イチコマ、ニコマ、サンコマと数える学生がかなりいて、イチコマに英語、ニコマにドイツ語のように使っている。一週間に英語を～コマとるのような、数量単位としての使い方なら和数詞を使い、ヒトコマ、フタコマになる傾向もあるようで、数詞の使い分けが行われているようなのが興味深い。

二十世紀半ば頃、すでに和数詞と和語の助数詞の使い方がひとによってずいぶん異なったようで、マーティン(1954:186)は、和数詞がひとによって使われ方に差が出ていることを述べ、10まで和数詞を使うひとがいるが、最初の幾つかの数字にしか和数詞を使わないひとがあると指摘している。ココノなどはココノエでは古い言い方が残っているが、早い時期にクやキューに変化している。

「九箱」なら明治期にはココノハコだったと考えられるが、ココノハコがその後どのような変化をたどったか、発音出版年データで見ておこう。

【九箱】

- ① ココノハコ (赤田/里見 1903)
- ② ココノハコ、クハコ、キューハコ (グロスマン 1927)
- ③ クハコ、キューハコ (ヤマギワ 1942)
- ④ ココノハコ、クハコ (ダン/ヤナダ/エコン 1958)
- ⑤ ココノハコ、キューハコ (文化庁 1971、文化庁 1975)
- ⑥ キューハコ (田野村 1990、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

6種類も語形の組み合わせが出てきている。しかし、大ざっぱに捉えれば、ココノ⇒ク⇒キューという変化を想定すれば、その枠を外れているわけではないが、資料による判断のずれが大きい。なお、ヤマギワ(1942)はクとキューしか使っていないが、他の和語の助数詞に対してはかなり複雑な記述をしている。

- | | |
|---------------------------|-------------|
| ① ココノキレ、キューキレ 【切れ】 | ② キュークミ 【組】 |
| ③ キューサラ 【皿】 | ④ クツツミ 【包】 |
| ⑤ クフクロ、キューフクロ 【袋】 | ⑥ クヘヤ 【部屋】 |
| ⑦ ココノマ、クマ、キューマ 【間、部屋の助数詞】 | |

ヤマギワの記述している数詞と助数詞の組み合わせはかなり不規則で、規則

としてまとめることはできないだろう²⁰。数詞と助数詞の組み合わせでは、時代ごとに規則性を示しているわけではなく、通時的な言語変化の方にむしろ規則性が認められる傾向がある。ヤマギワの記述にしても和語の助数詞で使える数詞「九」のココノ⇒ク⇒キューという変化の流れからは逸脱していない。もちろん、ヤマギワの記述している日本語では、個々の助数詞による言語変化の受け入れ時期や受け入れの早さに違いがあるという解釈も可能である。しかし、早さの違いに規則性を見ることも難しい。たとえば、ハ行音で始まる助数詞でココノが早く廃れたという規則性を仮説として立てても、他の資料で確認することはできない。ヘヤ（部屋）の場合を例にとると、高橋（1945）も文化庁（1971、1975）もココノヘヤを認めている。共時的には規則性が認めがたいことは、文化庁（1971）の和語の助数詞と数詞についてもあてはまり、7についてナナのほかにシチを「通り」、「桁」、「坪」で容認しているが、「箱」、「部屋」、「月（つき）」、「色（いろ）」、「間（ま）」では、ナナだけであるが、共時的に規則を立てて説明するのは難しいだろう。

和語の助数詞と7の関係では、ナナはもともと和数詞なので、ナナがそのまま使われ続け、現在までそのまま来ているわけではない。数詞を1本化する過程では、7以外では、漢数詞が統一数詞になるのがふつうだったので、ナナをシチに替えようという動きがまったくなかったわけではない。発音出版年データにもそういうゆれを観察することができる。

【七桁】

- ① ナナケタ、シチケタ（文化庁 1971、文化庁 1975）
- ② ナナケタ（NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）

【七度（たび）】

- ① ナナタビ（ホフマン 1867、西村 [1888]—1898、ヴァルター 1891、高橋 1945）
- ② ナナタビ、シチタビ（赤田／里見 1903、ウェインツ 1904）

【七通り】

- ① ナナトリー、シチトリー（文化庁 1971、文化庁 1975）
- ② ナナトリー（NHKアク 1966、NHKアク 1985、田野村 1990、NHKことば

²⁰ ナナやキューなどの数詞が例外なかもしれないが、通時的規則性はあっても、共時的規則性はないという例だろう。

1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)

【七箱】

- ① ナナハコ (赤田／里見 1903、グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、文化庁 1971、文化庁 1975、田野村 1990、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)
- ② ナナハコ、シチハコ (ダン／ヤナダ／エコノ 1958)

資料数が少ないので、正確な出現時期は分からないが、資料中でシチが現れているのは、二十世紀初頭のシチタビ (1903、1904) からシチハコ (1958)、シチケタ (1971、1975)、シチトーリ (1971、1975) と、時期は一定しない。和語の助数詞にシチが出現したことは、和漢二系列の数詞を漢数詞に統一しようという力が働いたためと考えられるが²¹、すべての和語の助数詞にシチが現れたわけではないし、シチが出現した助数詞においてもナナがシチを押し戻していることは、通時的に見ると、数詞を一本化する決定期のゆれと解釈することができるだろう。最終的に和漢二系列の数詞の統一は漢数詞のシチではなく、和数詞のナナが統一数詞になることで決着したことを意味していると解釈できるだろう。ヨンは和製漢数詞と考えられるので²²、和数詞が統一数詞の地位に付いたのはナナが唯一の例であろう。

6. 要約

ナナとキューが現在では広く使われるようになってきているが、明治期以降の言語変化について発音資料の出版年をもとにシチヤクからの変化の条件、理由、時期などを探った。

本稿の内容を簡潔にまとめると、以下の観点からの考察として整理することができる。

- ① 助数詞の語頭が有声音か無声音か。有声音の場合は、シチヤクは長く維持された。

²¹ シチだけでなく、シモ和語の助数詞と使われる傾向が一時期存在したようである。

²² 和製漢数詞とは筆者の勝手な命名であるが、ヨンを和数詞と分類する研究者がいる一方で、ヨとサンを関連付け、ヨンの語形が和漢混交という見方や機能的に漢数詞の系列と分類すべきという考え方も支持されているようである (安田 2002 : 135、安田 2010 : 1 - 2)。

- ② 後続助数詞との関係で、1 拍のクの母音の無声化が成立したかどうか。1 拍でアクセントを持たないクはさらに無声化するような場合は欠点が大きすぎたと言える。そのような音韻的な欠点が、アクセントを数詞に持ち、2 拍のキューに置き換わる言語変化を促したと考えられる。
- ③ ヨ化していないシが使われ、シとシチの混同が起きた可能性があったかどうか。ヨバン（四番）ならシチバン（七番）のままでも 4 と 7 の混同の心配はないので、ナナ化を促す強い理由はない。
- ④ 数詞・助数詞が数量単位の用法で使われているか、順序数の用法で使われているか。序数詞を持たない日本語でも順序数と数量単位の用法では数詞の言語変化にある程度の違いが見られ、順序数では数詞の古い語形のシチヤクが維持される傾向があるようだ。シチガツ（七月）、シチジ（七時）、クガツ（九月）、クジ（九時）などが典型的である。

【参考文献と引用文献】

赤田開太／里見純吉（1903）、How to speak Japanese Correctly. 初版、岡崎屋書店。

秋永一枝編（1958）、『明解日本語アクセント辞典』、三省堂。「三省堂アク 1 1958」と略す。

秋永一枝編（1981）、『明解日本語アクセント辞典』 2 版、三省堂。「三省堂アク 2 1981」と略す。

秋永一枝編（2001）、『新明解日本語アクセント辞典』、三省堂。「三省堂アク 3 2001」と略す。

アストン（1869）、(William George Aston)、A Short Grammar of the Japanese Spoken Language. Nagasaki.

アストン（1888）、(William George Aston)、A Grammar of the Japanese Spoken Language. 4 版。

アブラハム／ヤマモト（1950）、(Richard D. Abraham & Yamamoto Sannosuke)、Japanese Conversaphone. ニューヨーク (R. D. Dortina Co., Inc.)。

阿部正直（1937）、(Abe Masanao)、A new Japanese course for beginners. The Japanese Language Association.

イーストレキ／神田乃武（1891）、『和英袖珍新字彙』、三省堂。

伊澤修二（1911）、『国定小学読本正読法』、楽石社。「伊澤正読法 1911」と略す。

イナモト (1972)、(Inamoto Noboru)、Colloquial Japanese. Tuttle.

井上明 (1958)、A New Handbook of Conversation Japanese. 改訂版、邦題：
『新々日本語会話独習』、初版は1954、日研社。

井上十吉 (1909)、『新訳和英辞典』、三省堂。

NHK放送文化研究所編 (1992)、『NHKことばのハンドブック』、日本放送出版協会。「NHKことば1 1992」と略す。

NHK放送文化研究所編 (1998)、『NHK日本語発音アクセント辞典新版』、日本放送出版協会。「NHKアク新 1998」と略す。

NHK放送文化研究所編 (2005)、『NHKことばのハンドブック』2版、日本放送出版協会。「NHKことば2 2005」と略す。

小川芳男／佐藤純一 (1963)、『日本語四週間』、大学書林。

オキノ (1943)、(M. Larry Okino)、Practical Standard Japanese with Military Text. Philadelphia: David McKay Company.

オノ (1963)、(Ono Hideichi)、Everyday Expressions in Japanese. The Hokuseido Press.

落合直文 (1895)、『日本大文典』第2編、博文館。

尾本憲 (1936)、Mrs. Omoto's Japanese Conversation. 訂正増補再版、初版は1935年、川瀬日進堂。

海外技術者研修協会編 (1978)、『日本語の基礎 I 〈分冊英語版〉』、海外技術者研修調査会。「基礎 I 分冊 1978」と略す。

海外技術者研修協会編 (1990)、『新日本語の基礎 I 分冊 英語訳』、スリーエーネットワーク。「新基礎 I 分冊 1990」と略す。

合衆国陸軍省編 (1944)、(War Department)、Restricted Japanese Phrase Book. ワシントン。

金澤一郎 (1908)、『日西会話』、大日本図書。

カワタ (1977)、(Yoshiyuki Kawata)、Let's Speak Japanese. Hawaii: The Petroglyph Press.

清岡暎一 (1946)、『日本語速成三十時間』、清話会出版部。

清岡暎一 (1953)、『日本語三十時間』、上記の『日本語速成三十時間』の再改訂版、北星堂。

国語調査委員会編 (1916)、『口語法』、文部省。「国語調査委 1916」と略す。

国際基督教大学 (1996)、『ICUの日本語 初級2』、講談社インターナショナル。「ICU 1996」と略す。

- クルチウス (1857)、『クルチウス 日本語文典例証』、三澤光博訳、明治書院、1971。
- グロスマン (1927)、(Fred N. Grossmann)、『独習日英会話篇』、川瀬日進堂。
- 黒田太久馬 (1901)、The Spoken Language of Japan: A Course of Exercises in Familiar Conversation. 奥付によると邦題は『和英会話』、金港堂。
- コバヤシ (1908)、(小林米珂)、Kelly & Walsh's Hand-Book of the Japanese Language for the Use of Tourists and Residents. 2版、ケレー・ウォルシュ商会。初版は1896年。「コバヤシ [1896]—1908」と略す。コバヤシは日本人ではなく、イギリス人のJ. E. de Beckerで、後に日本に帰化したひと。法律顧問で、遊郭案内のThe Nightless Cityなども著わした。
- 小宮山治郎八 (1898)、『实用速成和英会話』、尚栄堂、弘集堂。
- コリヤード (1632)、『コイヤード 日本語文典』、復刻及び大塚高信訳、坂口書店、1934年。
- ザイデル (1910)、(August Seidel)、『独和字典』、ベルリン。
- サトウ (1873)、(Ernest Satow)、Kuaiwa Hen. (「会話篇」)。
- サトウ／石橋 (1876)、(Ernest Mason Satow/Ishibashi Masakata)、初版。復刻版 (『英和俗語辞典』、1970、勉誠社)。「サトウ 1 1876」と略す。
- サトウ／石橋 (1879)、(Ernest Mason Satow/Ishibashi Masakata)、2版。復刻版 (『英和俗語辞典』、1970、勉誠社)。2版には巻末に数詞と助数詞の解説が加わっている。「サトウ 2 1879」と略す。
- 佐藤寛立案、島田豊訳述の『新編英和実用会話』(松栄堂、明治32年)。
- サリヴァン (1944)、(E. J. Sullivan)、Elementary Japanese. 2版、United States of America Commonwealth Press。
- GHQ情報教育部編 (1946)、(Information & Education Section)、Japanese Phrase Book for the Occupation Forces. GHQ。「GHQ 1946」と略す。
- シャンド (1907)、(W. J. S. Shand)、Japanese Self-Taught. 初版、ロンドン：E. Marlborough。
- ジョーデン (1962)、Eleanor Harz Jordan、Beginning Japanese Part 1. Yale University Press。
- シラト (1962)、(Ichiro Shirato)、Living Language Conversation Manual Japanese. ニューヨーク：Crown Publishers。
- 城岡啓二 (2009)、「数詞ヨン・ナナ・キューの固有名詞への浸透について—地名、小字名、姓における四・七・九—」、『人文論集』59号の2、静岡大学

人文学部、73-105。

城岡啓二 (2010)、「変化する日本語の近過去を観察する—『当』とヨン・ナナ・キューの言語変化から—」、『聞いてよかった！日本語ゼミナール』、静岡大学人文学部、75-91。

城岡啓二 (2011)、「日本語の基本数詞シのヨとヨンへの言語変化について—ヨン化とヨ化を発音資料に探る—」、『人文論集』61号の1・2 (合併号)、103-152。

神保格 (1934)、『小学国語読本朗読法』巻三、厚生閣。

スリーエーネットワーク編 (1998)、『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説 英語版』初版、海外技術者研修協会編 (1978) の後継教材、スリーエーネットワーク。「みんな1 1998」と略す。

スリーエーネットワーク編 (2012)、『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説 英語版』第二版、海外技術者研修協会編 (1978) の後継教材の第二版、スリーエーネットワーク。「みんな2 2012」と略す。

セワード (1968)、(Jack Seward)、Japanese in Action. New York・Tokyo (Wetherhill)。

高橋龍雄 (1904)、『国定読本発音辞典』、同文館。「高橋発音 1904」と略す。

高橋盛雄 (1945)、『ローマ字・日本語会話』、英題：How to speak Japanese Language. 産業図書。リストでは「高橋 1945」と略す。

谷守正寛 (1992)、『日本語の文法と用法』、晃洋書房。

谷守正寛 (1994)、Handbook of Japanese Grammar. Tuttle Publishing.

田野村忠温 (1990)、「現代日本語の数詞と助数詞—形態の整理と実態調査—」、『奈良大学紀要』18号、194-216。

玉村文郎 (1986)、「数詞・助数詞をめぐって」、『日本語学』、8月号、4-14。

玉村文郎他編 (1993)、『日本語実用辞典』、スリーエーネットワーク。

ダン／ヤナダ／エコノ (1958)、(C. J. Dunn, S. Yanada & M. Econ)、Teach Yourself Japanese. The English University Press.

チェンバレン (1886)、(B. H. Chamberlain)、A Simplified Grammar of the Japanese Language Modern Written Style. London, Yokohama.

チェンバレン (1888)、(B. H. Chamberlain)、A Handbook of Colloquial Japanese. 初版。2版は1889年、3版は1898年、4版は1907年。

土江清治 (1948)、『会話日本語初歩』、大倉書店。扉は『口語日本語初歩』とあり、奥付は『日本語の学び方』で書名が不統一。

常深千里／神保格 (1932)、『国語発音アクセント辞典』、厚生閣。「常深アク 1932」と略す。

長沼直兄 (1945a)、First Lessons in Nippongo. 開拓社。

長沼直兄 (1945b)、English-Japanese Everyday Words and Phrases. 三省堂。

長沼直兄(1951)、Grammar & Glossary accompanying Naganuma's Basic Japanese Course. 開拓社。

にほんごの会企業組合編 (1995)、『日本語を学ぶ人の辞典』、新潮社。「にほんごの会 1995」と略す。

西村庄太郎 (1898)、English and Japanese Mercantile Conversations. 『英和商用対話』 4 版、初版は1888、丸善。「西村 [1888]－1898」と略す。

日本のローマ字社 (1928)、Pocket Handbook of Colloquial Japanese. 2 版、初版は1920年。「ローマ字社 [1920]－1928」と略す。

日本放送協会編 (1941)、『同音語類音語』。「同音類音 1941」と略す。

日本放送協会編 (1943)、『日本語アクセント辞典』。「NHKアク 1943」と略す。

日本放送協会編 (1966)、『日本語発音アクセント辞典』。「NHKアク 1966」と略す。

日本放送協会編 (1985)、『日本語発音アクセント辞典』改訂新版。「NHKアク 1985」と略す。

ノグチ (1954)、(Hatsue Noguchi)、Japanese Conversation. the Toop Information & Education Section (Headquarters, Camp Kobe).

ノッス (1907)、(Christopher Noss)、A Text Book of Colloquial Japanese based on Lehrbuch der Japanischen Umgangssprache. 出版社。

ヴァカーリ (1937)、(Oreste Vaccari & Enko Elisa Vaccari)、『日本語会話文典』、英題はComplete Course of Japanese Conversation-Grammar.

ハラダ／クニトモ (1934)、(Tasuku Harada & George Tadao Kunitomo)、Introduction to Colloquial Japanese. University of Hawaii.

バラントイン (1949)、(Joseph W. Ballantine)、Japanese As It Is Spoken; A Beginner's Grammar. 2 版、スタンフォード大学出版。

ヴァルター (1891)、(Edward Theodor Walter)、Lehrbuch der Modernen Japanischen Umgangssprache. ライプツィヒ。

バレエ (1908)、(Balet)、Grammaire Japonaise. 3 版、三才社。初版は1899年。バレエ [1899]－1908

プラウト (1891)、(Hermann Plaut)、Japanisches Lesebuch. Stuttgart & Berlin.

- プラウト (1904)、(Hermann Plaut)、Japanische Konversations-Grammatik. ドイツ語版初版。ハイデルベルク他：Julius Groos。
- ブリנקリー (1897)、『和英大辞典』、4 版、ブリנקリー／南條文雄／岩崎行親編、初版は1896年、三省堂。
- ブレイラー (1963)、(Everett F. Bleiler)、Essential Japanese Grammar. New York: Dover Publications, Inc.
- プレントイス (1905)、(Elsie Pym Prentys)、Japanese for Daily Use. ニューヨーク (William R. Jenkins)。協力者としてKametarō Sasamotoをあげている。
- ブロック／ジョーデン (1945)、(Bernard Bloch & Eleanor Harz Jordan)、Spoken Japanese. 第1 巻、Holt Spoken Language Series。
- 文化庁 (1971)、「数えることば」、『外国人のための基本語用例辞典』初版、付録のpp.55-61。
- 文化庁 (1975)、「助数詞一覧表」、『外国人のための基本語用例辞典』2 版、付録のpp.56-61。
- ヘボン (1867)、『和英語林集成』初版、「ヘボン1 1867」と略す。
- ヘボン (1872)、『和英語林集成』2 版、「ヘボン2 1872」と略す。
- ヘボン (1886)、『和英語林集成』3 版、「ヘボン3 1886」と略す。
- ペリー (2008)、(Fred Perry)、“Grammar”. Tuttle Concise Japanese Dictionary. xiii-xxxii. Samuel E. MartinのMartin’s Concise Japanese Dictionary (1994)の改訂版であるが、数詞や助数詞の記述は元の辞書にはなく、ペリーによる改訂時のもの。
- ベルリッツ (1974)、Japanese for Travellers.
- ヘンリー・サトウ (1896)、Henry Satoh (日本人)、Anglo-Japanese Conversation Lessons. 25版、初版は1885に出版されている。「佐藤 [1885]-1896」と略す。
- ホバート＝ハムデン／パーレット改訂 (1904)、(E. M Hobart-Hampden/H. G. Parlet)、An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language. 3 版。復刻版 (『英和口語辞典 (第3 版)』、1985、名著普及会)。「サトウ3 1904」と略す。
- ホフマン (1867)、『ホフマン 日本語文典』、三澤光博訳、明治書院、1968。
- マーティン (1954)、(S. E. Martin)、Essential Japanese. 初版、タトル。
- マーティン (1975)、(S. E. Martin)、A Reference Grammar of Japanese. タトル。

- マイスナー(1938)、(Kurt Meissner)、Unterricht in der Japanischen Umgangssprache. 教文館。
- マクガバン (1920)、(William Montgomery McGovern)、Colloquial Japanese.
- マクレイン (1981)、(Yoko M. McClain)、『口語日本文法便覧』、北星堂。
- 松井知時・上田駿一郎 (1907)、『新和仏辞典』、大倉書店。
- 松宮一也 (1946)、A Practical Japanese Conversation. 産業図書。
- 松宮彌平 (1937)、A grammar of spoken Japanese. 2 版。初版は1935年。
- マルタン (1970)、(J. M. Martin)、『マルタン和仏大辞典』、白水社。
- ミウラ (1965)、(Miura Junji)、Practical Spoken Japanese Self-Taught. 邦題：『実用日本語会話』三省堂。
- 三宅武郎 (1943)、『国民学校アクセント解説』第一学年用、第二学年用、国語文化研究所。
- 陸奥廣吉 (1894)、A Japanese Conversation Course. 丸善。
- 郵松守義 (1886)、『明治会話篇』巻之一、三版、小柳津要人 (出版人)、初版は1885年。
- 安田尚道 (2002)、「シ (四) からヨンへー4 を表わす言い方の変遷一」、『青山語文』第32号、青山学院大学日本文学会、124-138。
- 安田尚道 (2004)、「シチ (七) からナナへー漢語数詞系列におけるナナの成立一」、『青山語文』第34号、青山学院大学日本文学会、130-141。
- 安田尚道 (2010)、「シ (四) からヨンへー4 を表わす言い方の変遷一」、『青山語文』第40号、青山学院大学日本文学会、1-14。
- ヤマギワ (1942)、(Joseph K. Yamagiwa)、Modern Conversational Japanese. McGraw-Hill。
- 吉田弥寿夫他編 (1973)、『あたらしい日本語』、Japanese for Today. 学研。年代データでは「あたらしい 1973」と略記。
- 吉田夏也 (2002)、「音声環境が母音の無声化に与える影響について」、『国語学』第53巻3号、国語学会、34-47。
- ラゲ／小野 (1905)、E. Raguét／小野藤太。『仏和会話大辞典』、天主公会。
- ランゲ(1890)、Rudolf Lange. Japanisches Lehrbuch der japanischen Umgangssprache. Stuttgart & Berlin. (『日本口語教科書』)。
- ルマレシャル (1904)、(J. M. Lemaréchal)、『和仏大辞典』、天主堂。
- レヴィン (2003)、(Bruno Lewin)、Abriß der Japanischen Grammatik. 5 版、初版は1959年。

- ローズ=イニス (1915)、(Arthur Rose-Innes)、Vocabulary of Common Japanese Words with Numerous Examples & Notes. Conversational Japanese for Beginners. Part III. ケリー、アンド、ウオルシ株式会社。
- ローズ=イニス (1919)、(Arthur Rose-Innes)、Elementary Grammar of the Japanese Spoken Language. Conversational Japanese for Beginners. New Edition. Part II. 4版、ケリー・アンド・ウオルシ。初版は1916年。
- ロドリゲス (1608)、『日本大文典』第三巻、全巻の翻訳が土井忠生訳注で三省堂から1955年に出版。
- ワグスタッフ (1947)、(Edwin Wagstaff)、Little Giant. Manual and Dictionary Japanese in Roman Letters. 協力者 (collaborator) として Mariko Nishio があげられている。
- ウィミス/アキヤマ (1945)、(Stanley Wemyss & Kanae Akiyama)、Short Cuts to Japanese. A Primer of the Japanese Language. ニューヨーク (Padell Book Company)。
- ウェインツ (1904)、(H. J. Weintz)、Hossfeld's Japanese Grammar. ロンドン (Hirschfeld Brothers, Limited)。
- ウェインツ (1907)、(H. J. Weintz)、Japanese Grammar Self-taught. 2版。ロンドン (E. Marlborough & co.)。

【附録：7と9の発音出版年データ】

本文に発音出版年データを出していないものに限定した。7と9の順に掲載。結合数詞については小さい数字から並べてある。数詞と助数詞の組み合わせは、助数詞の五十音順に配列。明治期の発音データが未発見の「七/九円」「七/九階」「七/九回」「七/九個」「七/九冊」「七/九時間」「七/九週間」「七/九代」「七/九頭」「七/九列」は未掲載。

7 の 結 合 数 詞

【17】

- ① ジューシチ (サトウ 1 1876、サトウ 2 1879、佐藤 [1885]—1896、郵松 1886、西村 [1888]—1898、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、黒田 1901、サトウ 3 1904、プラウト 1904、ウェインツ 1904、プレントィス 1905、ザイデル 1910、マクガバン 1920、ハラダ/クニトモ 1934、阿部 1937、

ヤマギワ 1942、オキノ 1943、長沼 1945b、ブレイラー 1963、イナモト 1972、カワタ 1977)

② ジューシチ、ジューナナ (グロスマン 1927、高橋 1945、松宮 1946、マーティン 1954、三省堂アク 1 1958、小川／佐藤 1963、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、あたらしい 1973、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)

③ ジューナナ (尾本 1936、合衆国陸軍省編 1944、基礎 I 分冊 1978)

【7000】

① シチセン (赤田／里見 1903、ザイデル 1910)

② シチセン、ナナセン (グロスマン 1927、ヴァカーリ 1937、高橋 1945、松宮 1946、GHQ 1946、マーティン 1954、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、オノ 1963、NHKアク 1966、田野村 1990、NHKアク新 1998)

③ ナナセン (オキノ 1943、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、ICU 1996、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)

7 と 助 数 詞

【七階】

① シチカイ、ナナカイ (グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、三宅 1943、高橋 1945、GHQ 1946、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、NHKアク 1966、文化庁 1971)

② ナナカイ (ジョーデン 1962、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

【七か月】

④ シチカゲツ (クルチウス 1857、ホフマン 1867、黒田 1901、赤田／里見 1903、バレエ 1908、ローズ=イニス 1919、グロスマン 1927、オキノ 1943、高橋 1945、井上 1958)

⑤ シチカゲツ、ナナカゲツ (ヴァカーリ 1937、サリヴァン 1944、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、イナモト 1972、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、みんな 1 1998)

- ⑥ ナナカゲツ (NHKアク 1966、NHKことば1 1992、谷守 1994、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【七か年】

- ① シチカネン (赤田／里見 1903、高橋発音 1904、グロスマン 1927、高橋 1945、三省堂アク1 1958)
② ナナカネン (NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)

【七軒】

- ① シチケン (アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、松宮 1946、)
② シチケン、ナナケン (ヤマギワ 1942、セワード 1968、文化庁 1971)
③ ヒチケン (合衆国陸軍省編 1944)
④ ナナケン (NHKアク 1966、基礎I分冊 1978、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【七歳】

- ① シチサイ (赤田／里見 1903、高橋発音 1904、グロスマン 1927)
② シチサイ、ナナサイ (高橋 1945、GHQ 1946、三省堂アク1 1958、オノ 1963、文化庁 1971)
③ ナナサイ (基礎I分冊 1978、NHKアク 1985、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、玉村 1993、谷守 1994、みんな1 1998、ペリー 2008、みんな2 2012)

【七十歳】

- ① シチジッサイ (赤田／里見 1903、オノ 1963)
② シチジッサイ、ナナジッサイ (高橋 1945)

【七時】

- ① シチジ (ウェインツ 1904、グロスマン 1927、常深アク 1932、阿部 1937、ヤマギワ 1942、三省堂アク1 1958、ジョーデン 1962、NHKアク 1966、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎I分冊 1978、マクレイン 1981、NHKアク 1985、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、みんな2 2012)
② シチジ、ナナジ (尾本 1936、土江 1948、イナモト 1972、ICU 1996、ペリー 2008)

【七種】

- ① ヒチシュ（ホフマン 1867）
- ② シチシュ、ナナシュ（文化庁 1971、文化庁 1975）
- ③ ナナシュ（NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）

【七艘】

- ① ヒチソー（ホフマン 1867）
- ② シチソー（アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、高橋 1945）
- ③ シチソー、ナナソー（ヤマギワ 1942、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、セワード 1968）
- ④ ナナソー（NHKアク 1966、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）

【七足】

- ① シチソク（アストン 1869、黒田 1901、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、長沼 1945b、高橋 1945、井上 1958）
- ② シチソク、ナナソク（ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975）
- ③ ナナソク（プレイヤー 1963、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1966、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012）

【七台】

- ① シチダイ（アストン 1888、赤田／里見 1903、高橋 1945、マクレイン 1981）
- ② シチダイ、ナナダイ（ヤマギワ 1942、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ③ ナナダイ（NHKアク 1966、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1985、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、みんな1 1998、ペリー 2008、みんな2 2012）

【七着（衣類）】

- ① シチチャク（赤田／里見 1903）
- ② ナナチャク（プレイヤー 1963、セワード 1968、マクレイン 1981、みんな1 1998、みんな2 2012）

【七通】

- ① シチツー (赤田／里見 1903)
- ② シチツー、ナナツー (ヤマギワ 1942、高橋 1945、セワード 1968)
- ③ ナナツー (あたらしい 1973、NHKことば1 1992、NHKことば2 2005)

【七度 (回数)】

- ① シチド (ホフマン 1867、西村 [1888]-1898、ヴァルター 1891、赤田／里見 1903)
- ② シチド、ナナド (三宅 1943、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、文化庁 1971、イナモト 1972、NHKアク 1985、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)
- ③ ナナド (NHKアク 1966、ペリー 2008)

【七人】

- ① シチニン (アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェイン ツ 1904、常深 1932、阿部 1937、ヤマギワ 1942、三宅 1943、NHKア ク 1943、長沼 1945b、高橋 1945、GHQ 1946、三省堂アク1 1958、井 上 1958、ブレイラー 1963、NHKアク 1966、セワード 1968、イナモ ト 1972、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHK ことば2 2005)
- ② ナナニン (尾本 1936)
- ③ ヒチニン (合衆国陸軍省編 1944)
- ④ シチニン、ナナニン (清岡 1946、マーティン 1954、ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、小川／佐藤 1963、文化庁 1971、あたらしい 1973、基礎 I 分 冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな2 2012)

【七年】

- ① シチネン (クルチウス 1857、赤田／里見 1903、グロスマン 1927、常 深 1932、阿部 1937、NHKアク 1943、高橋 1945、GHQ 1946、三省堂ア ク 1 1958、NHKアク 1985)
- ② シチネン、ナナネン (ダン／ヤナダ／エコ ン 1958、ジョーデン 1962、NHK アク 1966、文化庁 1971、イナモト 1972、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分 冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【七杯】

- ① ヒチハイ (ホフマン 1867)
- ② シチハイ (アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、サトウ 3 1904、ウェインツ 1904、グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、三宅 1943、長沼 1945b、井上 1958、セワード 1968)
- ③ シチハイ、ナナハイ (ヴァカーリ 1937、清岡 1946、ダン／ヤナダ／エコ 1958、ジョーデン 1962、文化庁 1971、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005)
- ④ ナナハイ (ブレイラー 1963、基礎 I 分冊 1978、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、谷守 1994、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)

【七倍】

- ① シチバイ (郵松 1886、西村 [1888]–1898、赤田／里見 1903)
- ② シチバイ、ナナバイ (ダン／ヤナダ／エコ 1958)
- ③ ナナバイ (三省堂アク 1 1958、マクレイン 1981、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008)

【七番】

- ① シチバン (クルチウス 1857、ヴァルター 1891、赤田／里見 1903、常深 1932、NHKアク 1943)
- ② シチバン、ナナバン (グロスマン 1927、高橋 1945、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコ 1958、文化庁 1971、マクレイン 1981、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005)
- ③ ナナバン (基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)

【七匹】

- ① シチフィキ (クルチウス 1857)
- ② シチヒキ (アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、サトウ 3 1904、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、マクガバン 1920、グロスマン 1927、常深 1932、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、長沼 1945b、井上 1958)
- ③ ナナヒキ (尾本 1936、小川／佐藤 1963、基礎 I 分冊 1978、NHKことば 1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)
- ④ シチヒキ、ナナヒキ (ヤマギワ 1942、三宅 1943、高橋 1945、清岡 1946、

松宮 1946、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、プレイヤー 1963、NHKアク 1966、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、イナモト 1972)

【七秒】

- ① シチビョー (赤田／里見 1903)
- ② シチビョー、ナナビョー (ヤマギワ 1942、三省堂アク 1 1958、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975)
- ③ ナナビョー (マクレイン 1981、NHKアク 1985、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008)

【七分 (時間)】

- ① シチフン (赤田／里見 1903、マクガバン 1920、長沼 1945b)
- ② シチフン、ナナフン (ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、サリヴァン 1944、高橋 1945、長沼 1945a、松宮 1946、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、プレイヤー 1963、文化庁 1971、マクレイン 1981、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、みんな 1 1998)
- ③ ナナフン (NHKアク 1966、基礎 I 分冊 1978、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)

【七本】

- ① ヒチホン (ホフマン 1867)
- ② シチホン (アストン 1869、サトウ 2 1879、アストン 1888、サトウ 3 1904、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、グロスマン 1927、常深 1932、阿部 1937、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、長沼 1945b、高橋 1945、松宮 1946、井上 1958)
- ③ ナナホン (尾本 1936、小川／佐藤 1963、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば 1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな 1 1998、NHKことば 2 2005、ペリー 2008、みんな 2 2012)
- ④ シチホン、ナナホン (ヤマギワ 1942、三宅 1943、清岡 1946、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、プレイヤー 1963、セワード 1968、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975)

【七枚】

- ① シチマイ (アストン 1869、アストン 1888、ウェインツ 1904、阿部 1937、井上 1958)

- ② ナナマイ (尾本 1936、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、みんな 1 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)
- ③ シチマイ、ナナマイ (ヤマギワ 1942、清岡 1946、三省堂アク 1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、小川／佐藤 1963、ブレイラー 1963、セワード 1968、文化庁 1971、イナモト 1972、あたらしい 1973、マクレイン 1981、田野村 1990、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005)

【七羽】

- ① ヒチワ (ホフマン 1867)
- ② シチワ (アストン 1869、アストン 1888、高橋発音 1904、ウェインツ 1904、マクガバン 1920、グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、サリヴァン 1944、高橋 1945、井上 1958、セワード 1968)
- ③ シチワ、ナナワ (マーティン 1954、小川／佐藤 1963、NHKことば 1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば 2 2005)
- ④ ナナワ (NHKアク 1966、谷守 1994、ペリー 2008)

9 の 結 合 数 詞

【19】

- ① ジューク (サトウ 1 1876、サトウ 2 1879、佐藤 [1885] - 1896、郵松 1886、西村 [1888] - 1898、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、黒田 1901、サトウ 3 1904、プラウト 1904、ウェインツ 1904、ブレンティス 1905、ザイデル 1910、マクガバン 1920、ハラダ／クニトモ 1934、尾本 1936、阿部 1937、ヤマギワ 1942、オキノ 1943、合衆国陸軍省編 1944、長沼 1945b、小川／佐藤 1963、ブレイラー 1963、カワタ 1977)
- ② ジューク、ジューキュー (グロスマン 1927、高橋 1945、マーティン 1954、三省堂アク 1 1958、オノ 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、イナモト 1972、あたらしい 1973、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、ペリー 2008、みんな 2 2012)
- ③ ジューキュー (基礎 I 分冊 1978)

【900】

- ① クヒャク (ホフマン 1867、ランゲ 1890、ヴァルター 1891、黒田 1901、プラウト 1904、ウェインツ 1904、ザイデル 1910、阿部 1937、オキノ 1943)
- ② クヒャク、キューヒャク (グロスマン 1927、長沼 1945b、高橋 1945、

GHQ 1946、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、オノ 1963、イナモト 1972)

- ③ キューハヤク (ヴァカーリ 1937、マーティン 1954、三省堂アク1 1958、小川／佐藤 1963、ミウラ 1965、NHKアク 1966、文化庁 1971、あたらしい 1973、文化庁 1975、基礎I分冊 1978、マクレイン 1981、田野村 1990、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、ペリー 2008、みんな2 2012)

【9000】

- ① クセン (バレエ 1908、ザイデル 1910、オキノ 1943)
- ② クセン、キューセン (グロスマン 1927、高橋 1945、GHQ 1946、マーティン 1954、オノ 1963)
- ③ キューセン (ヴァカーリ 1937、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ミウラ 1965、NHKアク 1966、あたらしい 1973、基礎I分冊 1978、マクレイン 1981、田野村 1990、新基礎I分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、ペリー 2008、みんな2 2012)

9 と 助 数 詞

【九か月】

- ① クカゲツ (クルチウス 1857、ホフマン 1867、黒田 1901、赤田／里見 1903、バレエ 1908、ローズ＝イニス 1919、グロスマン 1927、ヴァカーリ 1937、オキノ 1943、サリヴァン 1944、高橋 1945)
- ② クカゲツ、キューカゲツ (ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、イナモト 1972)
- ③ キューカゲツ (NHKアク 1966、基礎I分冊 1978、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、谷守 1994、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【九か年】

- ① クカネン (赤田／里見 1903、グロスマン 1927)
- ② クカネン、キューカネン (高橋 1945)
- ③ キューカネン (NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)

【九軒】

- ① クケン (アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、合衆国陸軍省編 1944)

- ② クケン、キューケン（ヤマギワ 1942、松宮 1946）
- ③ キューケン（NHKアク 1966、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012）

【九歳】

- ① クサイ（赤田／里見 1903、常深アク 1932）
- ② クサイ、キューサイ（グロスマン 1927、高橋 1945、オノ 1963）
- ③ キューサイ（GHQ 1946、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1985、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、NHKことば1 1992、谷守 1994、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012）

【九種】

- ① クシュ（ホフマン 1867）
- ② キューシュ（文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）

【九台】

- ① クダイ（アストン 1888、赤田／里見 1903、高橋 1945、マクレイン 1981）
- ② クダイ、キューダイ（ヤマギワ 1942、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、NHKアク 1966、セワード 1968、文化庁 1971、文化庁 1975、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）
- ③ キューダイ（ジョーデン 1962、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、ICU 1996、みんな1 1998、ペリー 2008、みんな2 2012）

【九度（回数）】

- ① クド（ホフマン 1867、西村 [1888]－1898、ヴァルター 1891、赤田／里見 1903）
- ② クド、キュード（三宅 1943、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、NHKアク 1966、文化庁 1971、文化庁 1975、ペリー 2008）
- ③ キュード（三省堂アク1 1958、イナモト 1972、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005）

【九着（衣類）】

- ① クチャク（赤田／里見 1903）
- ② キューチャク（ブレイラー 1963、セワード 1968、マクレイン 1981、みんな

な1 1998、みんな2 2012)

【九人】

- ① クニン (アストン 1869、アストン 1888、赤田／里見 1903、ウェインツ 1904、常深 1932、尾本 1936、阿部 1937、オキノ 1943、合衆国陸軍省編 1944、長沼 1945b、高橋 1945、井上 1958、ブレイラー 1963、NHKアク 1966、NHKアク 1985)
- ② クニン、キューニン(ヤマギワ 1942、三宅 1943、NHKアク 1943、GHQ 1946、マーティン 1954、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、小川／佐藤 1963、ブレイラー 1963、セワード 1968、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975、基礎 I 分冊 1978、NHKことば1 1992、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)
- ③ キューニン (あたらしい 1973、新基礎 I 分冊 1990、玉村 1993、みんな1 1998、みんな2 2012)

【九年】

- ① キューネン (クルチウス 1857)
- ② クネン (赤田／里見 1903、グロスマン 1927、常深 1932、阿部 1937、GHQ 1946)
- ③ クネン、キューネン (NHKアク 1943、高橋 1945、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、ジョーデン 1962、NHKアク 1966、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975、基礎 I 分冊 1978、NHKアク 1985、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)
- ④ キューネン (みんな1 1998、みんな2 2012)

【九倍】

- ① クバイ (郵松 1886、西村 [1888] - 1898、赤田／里見 1903)
- ② クバイ、キューバイ (ダン／ヤナダ／エコノ 1958、マクレイン 1981)
- ③ キューバイ (三省堂アク1 1958、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

【九番】

- ① クバン (クルチウス 1857、ヴァルター 1891、赤田／里見 1903、常深 1932、マクレイン 1981)
- ② クバン、キューバン (グロスマン 1927、NHKアク 1943、高橋 1945、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、文化庁 1971、文化庁 1975、NHKことば1 1992、

NHKアク新 1998、NHKことば2 2005)

- ③ キューバン (三省堂アク1 1958、基礎I分冊 1978、新基礎I分冊 1990、みんな1 1998、ペリー 2008、みんな2 2012)

【九番目】

- ① クバンメ (赤田/里見 1903、サリヴァン 1944)
- ② クバンメ、キューバンメ (長沼 1945b、高橋 1945、文化庁 1971、文化庁 1975)
- ③ キューバンメ (ペリー 2008)

【九秒】

- ① クビョー (赤田/里見 1903)
- ② キュービョー (ヤマギワ 1942、三省堂アク1 1958、文化庁 1971、イナモト 1972、文化庁 1975、マクレイン 1981、NHKアク 1985、NHKことば1 1992、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)

【九分(時間)】

- ① クフン (赤田/里見 1903、マクガバン 1920)
- ② キューフン (ヴァカーリ 1937、ヤマギワ 1942、サリヴァン 1944、長沼 1945b、ジョーデン 1962、ブレイラー 1963、NHKアク 1966、文化庁 1971、文化庁 1975、基礎I分冊 1978、マクレイン 1981、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)
- ③ クフン、キューフン (高橋 1945、長沼 1945a、松宮 1946、ダン/ヤナダ/エコノ 1958)

【九本】

- ① クホン (ホフマン 1867、アストン 1869、サトウ2 1879、アストン 1888、サトウ3 1904、赤田/里見 1903、ウェインツ 1904、常深 1932、尾本 1936、阿部 1937、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、長沼 1945b、井上 1958)
- ② クホン、キューホン (グロスマン 1927、ヤマギワ 1942、三宅 1943、高橋 1945、松宮 1946、ダン/ヤナダ/エコノ 1958、セワード 1968)
- ③ キューホン (三省堂アク1 1958、ジョーデン 1962、小川/佐藤 1963、ブレイラー 1963、文化庁 1971、イナモト 1972、あたらしい 1973、基礎I分冊 1978、新基礎I分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、谷守 1994、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば

2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【九枚】

- ① クマイ (アストン 1869、アストン 1888、ウェインツ 1904、尾本 1936、阿部 1937、オキノ 1943、井上 1958)
- ② クマイ、キューマイ (ヤマギワ 1942、NHKアク 1943、高橋 1945、三省堂アク1 1958、ダン／ヤナダ／エコノ 1958、小川／佐藤 1963、セワード 1968、文化庁 1971、マクレイン 1981)
- ③ キューマイ (ジョーデン 1962、プレイヤー 1963、イナモト 1972、あたらしい 1973、基礎 I 分冊 1978、田野村 1990、新基礎 I 分冊 1990、NHKことば1 1992、玉村 1993、ICU 1996、NHKアク新 1998、みんな1 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008、みんな2 2012)

【九羽】

- ① クワ (ホフマン 1867、アストン 1869、アストン 1888、ウェインツ 1904、グロスマン 1927、常深アク 1932、NHKアク 1943、サリヴァン 1944、井上 1958)
- ② クワ、キューワ (ヤマギワ 1942、高橋 1945、セワード 1968)
- ③ クワ、キューワ、キューハ (マーティン 1954)
- ④ キューワ (小川／佐藤 1963、NHKアク 1966、NHKことば1 1992、谷守 1994、NHKアク新 1998、NHKことば2 2005、ペリー 2008)